

はじめに

大学の授業では、学生が教室のどの位置に座るかは決められていないが、自ずと座る位置は決まってくる。約 50 人のクラス授業を行っているとき、教壇からみて右側に座っている学生と、左側に座っている学生とでは、理解力や態度に差があるのではないと思うようになった。前列の学生は熱心で、後列は熱心さが足りないと感じるのは自然である。熱心な前列でも、右側の学生は理解力が速いのに対し、左側は遅いように感じた。また、後列左側の学生は私語が多いのではと思った。このことをゼミ生に話すと、入口が教壇からみて左側にあるのか、右側にあるのかによって違うのではないかと反論された。そこでデータをとることにした。

私は 2 年次対象の統計学を担当し、複数クラスを一緒にして授業を行っていた。そこで 4 月最初の授業で、1 年次に受講した語学授業での座席位置についてアンケートをとった。また、統計学の前期・後期の試験成績と出席回数をとった。標本数を多くするため数年にわたってデータを収集した。複数クラス・複数年度をまとめて集計し検証した結果、私の実感が裏付けられると結論した。この観点から、教授会やゼミ授業での座席位置を解釈すると、納得がいった。

数年にわたって座席位置を気にかけているうちに、都市の中心市街地における商業店舗やサービス業の立地位置にも同じ法則が働いているのではないかと思うようになった。住んでいる東京周辺の街はほとんど歩いてみた。3 日ほどの旅行を繰り返し、日本全国の大多数の街を歩いてみた。その結果、座席位置と同様のことが言えるのではないかと感じるようになった。

右地区・左地区といっても、どの地点からどの方向をみて言うのか、主観が入りやすい。多くの人が歩いて行く方向が基準になると考えた。多くの場合、鉄道駅が中心市街地の起点になっている。そこから街一番の商店街へ進む方向を基準にすると、わかりやすかった。その商店街を含めた右方向を右地区に、左方向を左地区と考えた。右地区には街の顔となる店舗が、左地区にはスナックなどの歓楽街があった。ただし、それだけでは説明のつかないケースもある。浅草のように仲見世を寺へ向かうのが「主たる人の流れ」もあるし、港から街中へ進む方向が主たる人の流れもある。江戸時代の城下町では、城下を通過する街道筋に沿って商店が並ぶ街もある。明治になり鉄道が導入されたが、当初は汽車を敬遠し、駅は街外れに造られた。しかし次第に鉄道の重要さが認識され、鉄道駅を中心にした人の流れに変化してきた。それにつれて、商業・サービス業の店舗立地も対応してきた。従来からの店舗立地もあり、右地区・左地区という基準で店舗立地を解釈しようとすると複雑で、判断のしにくいケースもあった。

鉄道が導入された明治以降に都市が開発された地域としては、北海道がある。本州・四国・九州のように江戸時代以前から街があった都市とは違い、北海道都市の人の流れは複雑ではないと想像できた。街の変化の歴史を捉えることによって、「主たる人の流れ」の起

点と方向を定めることができるであろう。それが現状での人の流れと異なっているとしても、歴史的な経緯によって構成された店舗の立地状況を理解することができると判断した。個々の商業・サービス業店舗の位置をタウンページから収集し、店舗が密集している地域を対象に、右地区・左地区を定めることができる。それによって両地区の特徴を把握することができる。データで検証してみると、スナックはほとんど左地区に立地していた。また、酒をとまなう飲食店の多くも左地区に立地していた。それらが歓楽街を構成しているので、歓楽街は左方向にあると結論できた。

地理学では右地区・左地区という概念が出てこない。「街は同心円状に構成されている」と、なぜ言われているのか。西洋都市では右地区・左地区という視点が出てこない仕組みになっていて、その学問を受け入れているからではないか。そのように思考してきたのが本書の骨組みになっている。以下、目次順に概要を記述する。

第1章では、(1) クラス授業での座席位置を記述する。(2) 心理カウンセリングの一つとして箱庭療法がある。クライアントが箱庭にミニチュアを配置していき、それをカウンセラーが読みとって心の状態を判断する。判断の指針としてグリュンワルトの図式がある。その図式と座席位置との間に類似性がある。座席位置での教師は箱庭療法ではクライアントであり、学生はミニチュアに対応する。(3) 肖像画では右向き左頬を描くものが多い。とくに表面をつくろう顔では左頬をみせる傾向が強い。また、左向き右頬をみせるのは日常的な顔の場合が多い。肖像画での解釈を座席位置に当てはめてみる。右向き左頬の先に座っている学生は、同じように教師に向けて右向き左頬をみせている。その学生はクラスで表の顔であり、正統的な位置にある。左向き右頬の先には非正統的で日常的なやすらぎの顔がある。(4) 横顔を描くポートレートでは、顔を左に向けていることが多い。左は進む方向を意味し、束縛から解放され自由を求める方向になる。カンディンスキーの絵画論における上下左右の意味づけが、これと合致する。葛飾北斎の富岳三十六景の描き方もこれに重なる。日本では、マンガや絵巻物において左へ展開するのが進行方向である。しかし、西洋では左から右へ文字を書くので、絵画において左が進行方向であるかは判断がつかない。(5) トラック競技やダンスでは左回りが原則である。多くの人にとって、左が支持足・軸足であり、右が運動足・利き足である。したがって、左足で立って右足で蹴る方が、逆の場合よりも力が強いので、左回りが効率的である。(6) 軸足である左足で立つ方が、右足で立つよりも少し時間が長い。したがって、左足で立って右足を下ろした身体の位置と、右足で立って左足を下ろした位置を比べれば、少し左側に寄る。実際には眼でみて調整するので、左側には偏らない。しかし、眼をつぶっている状態で歩けば左に偏ってくることがみられる。それゆえ、歩行者は左側通行になりやすい。(7) エスカレーターでは、東京は左側に人が立って、右側を歩いて上る。しかし大阪では右側に人が立って、左側を歩いて上る。左側通行が自然であれば、大阪の状態が普通である。世界的にもそうである。なぜ東京を中心とした状態が生じたのかは、「人は右、車は左」を守ったからと考えたい。(1)

から(7)までの現象の背景には、左脳と右脳の機能の違いがある。左脳は論理的思考に優れており、右脳は感情的な面に優れていると言われている。多くの人がそのようであれば、集団としてそれが表現された結果とみなすことができるであろう。

(8) 脳の機能が反映した左右ではなく、文化的な側面での左右に関することを記述する。西洋では右が左より上位にある。そのことが新約聖書マタイ伝に記述されている。神は絶対である。しかし中国では、左が右よりも上位である尚左思想があった。日本もその影響を受けて、左大臣が右大臣よりも上位である。中国に神はいないが、それに代わる皇帝・天子がいた。紀元前 500 年頃には、すでに「天子は南面する」と言われていた。天子が南面すれば、その左手は東を指す。東は太陽が昇る方向であり、西は沈む方向である。昇る方向が上位であるので、左が上位になる。天子は神ではないので、尚左思想が膺炙するには、それなりの仕組みが必要であった。まず天子がいる都城内において、すべての人が天子に服従する位置にいないといけない。天子が居住する王宮は、当初は都城の中心に位置すると考えられていた。これでは天子の背面に人がいて不都合である。南面する天子の王宮は都城の北に位置しなければいけない。その発想をもたらしたのは遊牧民族である。また、王宮を構成する主要な建物は南北中軸線上に配置され、それを基準に左に配置される建物が、右に配置される建物より上位でなければいけない。その仕組みが完成するのは隋・唐時代の長安である。当然、隋・唐の皇帝には遊牧民族の血が入っている。

第2章では、北海道都市について記述する。(1) 各都市の変遷を理解するために、北海道史の概略を述べる。江戸時代の北海道では、津軽海峡を挟んで本州と向き合う渡島半島に松前藩があった。蝦夷地では幕藩体制に必要な米の収穫ができなかったので、松前藩には蝦夷地でのアイヌとの交易独占を許可していた。家臣である知行主が交易地を管理する商場知行制や、商人に管理を任せる場所請負制が行われていた。交易場所は 53 カ所あった。アイヌの人たちはそこでしか交易ができないようにされたので、アイヌの不満がたまり、1669 年のシャクシャインの戦いや、1789 年のクナシリ・メナシの戦いなどが起こった。

明治時代になり、政府にとって北海道の位置づけは、ロシアの南下政策への対応と、殖産興業政策としての開拓であった。当初は河川を利用する交通が主であった。とくに石狩川が重要視された。道路の開削も行われた。労働力としては、秩禄処分により没落した士族などが兵農兼務の屯田兵として、あるいは一般の入植者や囚人の使役も行われた。空知地方の石炭を運ぶための鉄道が小樽－札幌－幌内 に敷かれた。それを契機に北海道全土に鉄道網が敷設された。小樽・室蘭・釧路などの港湾も整備された。

(2) 北海道都市における中心市街地の経緯を記述し、主たる人の流れの起点と方向を定めた。それにしたがって、タウンページによる商業・サービス業の店舗位置をもとに、右地区・左地区あるいは起点地区・終点地区を求めた。都市の記述順序は国勢調査に記載されている順番である。2000 年当時は 34 市ある。そのうち集中地区の人口が 1 万人以上を対象にした。また札幌周辺の衛星都市は対象外にした。その理由は、人口が少ない都市や衛

星都市では、歓楽街ができにくいと想定されるからである。函館と室蘭は中心市街地が 2 つあるとみなした。江別市は野幌が、登別市は幌別が中心市街地を代表するとした。したがって、28 市・30 市街地になる。右地区・左地区は 23 市街地、起点地区・終点地区は 5 市街地、その他 2 市街地である。

(3) 対象になったのは 24,159 店舗であり、そのうちスナックは 7,334 店舗である。スナックは左右地区市街地には 6,029 店舗のうち 97.4%が左地区に立地している。すべての左右地区市街地において、スナックは左地区にほぼすべてが立地していた。歓楽街を構成する「酒をとまう飲食店」では 79.7%が左地区に立地していた。したがって、「歓楽街は左方向にある」と結論づけることができた。座席位置との対応では、起点が教師に相当する。個々の店舗は学生に対応する。左脳の機能は右地区に、右脳の機能は左地区に反映している。

第 3 章では、左右の観点からみた都市設計思想を記述する。(1) 地理学では「都市は同心円的に構成されている」という理論が背景にある。したがって、中心市街地においても右地区・左地区という観点はみられない。しかし、北海道の都市で実証するように、中心市街地では右地区・左地区によって立地する店舗の業種は異なっている。ヨーロッパの都市では、中心市街地における左右地区という観点が生じない仕組みになっていたと想定される。ヨーロッパにおける中世都市の成立過程をみることによって、それを明らかにする。ヨーロッパの中世都市は、中国の長安やイスラムの都市と比較して、圧倒的に人口が少ない。また民族移動が激しく、都市を防衛するために城塞を築く必要があった。城塞内の面積は狭いので、重要な施設は中心にある広場の周辺に配置された。広場から四方に通じる道があり門があった。起点は広場になるが、主たる人の流れが一方向に決まっているのではない。したがって右地区・左地区という観点が生じなかった。城壁が壊されるようになったのは絶対王政になり、都市自身ではなく、主権国家が広域で守るようになってからである。都市改造の例として、19 世紀中期に行われたパリの大改造と、ウィーンを取りあげる。

(2) 二十世紀の都市設計思想として、ハワード、コルビュジエ、ジェイコブスを取りあげる。ハワードはイギリスの産業革命により汚染された都市から逃れ、工業生産と農村の緑を取り入れた田園都市を構想した。各都市は 3 万人前後で、それぞれの都市を鉄道でつなぐというアイデアである。実際にできたのは 2 例しかなかったが、緑に囲まれた都市というアイデアは、日本でも郊外都市の開発に転用された。コルビュジエは交通・通信が発達した社会を背景に 300 万人の都市を構想した。緑に囲まれた広い敷地に高層ビル群を建てるという発想である。ジェイコブスはニューヨークの街について、コルビュジエ的発想であるモーゼスの計画に反対して、住民の安全性という観点から主張した。いずれの論者も左右地区という観点はない。しかし、左脳・右脳の機能の都市への反映という点では、右地区・左地区の見方と同等のものがみられる。すなわち効率的な都市という左脳の側面を

強調したコルビュジエやモーゼスに対し、安全性という右脳の側面を強調したジェイコブスの対立である。

(3) 日本の地方都市における現在の問題点は、中心市街地にある商店街がシャッター街化していることである。郊外にショッピングセンターやモールができ、人々は車でそこに買い物に行く。その結果、中心市街地にある商店街は衰退してきた。ただし、従来からの歓楽街がショッピングセンターとともに郊外に移ったということはない。中心市街地の再生に関するヴィジョンや施策は試みられてきたが、成功してきたとは言えない。本書での提案は、魅力ある生鮮食料品店を核として中心市街地を活性化することである。最寄品のうちでも特に毎日必要とするものは食料品である。コンビニでもおにぎり・パン・弁当類などを扱っているが、生鮮食料品の扱いは苦手である。スーパーでは生鮮食料品も扱っているが、ほとんどが規格化されたものである。肉・魚・野菜の規格化されていないものも含めて、素材そのものや調理品の販売、あるいは料理法を伝えるなどの専門業者がいれば、顧客は来るであろう。そのような新しいビジネスモデルが必要である。中心市街地に顧客が来れば、他の最寄品店も来るであろう。日々需要のあるものとして保育施設を含めてもよい。介護施設も同様である。中心市街地にあることによって、公共交通を利用して来ることができる。少子化が大きな問題になっている。これからも続く問題であるが、結婚した男女が共に働くことができれば、改善の方向になる。そのためにも退職した祖父母世代を活用したい。原則が決まれば、方法論は後からついてくる。